

新連載!!

病院のお仕事いろいろ

その1 病気と向き合う 主体的な生き方をサポート

がん化学療法看護認定看護師

三木幸代(みきゆきよ) 看護師長

がん研究が進み、画期的なスピードで進展している治療法のひとつが抗がん剤による化学療法です。これまでは入院治療が多かったですが、通院によって自由度の高いものとなっています。

本院の外来化学療法室では毎月約400名が治療を受けています。部屋には18台のリクライニングチェアがあり、音楽を聴きながら、あるいはテレビを観たりしながら快適に治療を受けていただいています。

そのがん化学療法看護の現場で、実践、指導、相談の3つの役割を果たす認定看護師である三木幸代師長は、次のように言います。

「患者さん自身はもちろん、ご家族もがんの告知を受けた後にさらに抗がん剤治療を受けることへのショックは大きい。だからこそ治療だけでなく心理面を含めた全般的なQOL(生活の質)向上のためのより専門的できめ細かなケアが大切です」抗がん剤治療に関して関係者、スタッフが協力をし、チーム医療の力が最大限に発揮できるよう、現場をまとめコーディネートするのも認定看護師の大切な役割です。

「患者さんの主体性を大切にしながら出来ることを伸ばし、不足しているところをサポートするのが重要だと思っています」と、三木師長。



多忙な日常業務をかかえながらも、大学院に進んでより高度なスペシャリストを目指してキャリアアップに取り組むのは、患者さんがいい方向で自ら意思決定できるよう支援するためです。

「主体的に生きないと、病気とも向き合えませんからね」というのは患者さんへの応援であると同時に、自分自身に言い聞かせる言葉のようでした。

その2 「楽しくなければリハビリじゃない!」

作業療法士

島 香里(しま かおり) 3年目

作業療法士は、身体の機能を回復させることを主な目的とした訓練ですが、患者さんが生き生きと生活できるようになるためには、それ以上に精神的な面が大きな要素を占めます。

何よりも、本人が自立したいと思えるように意欲を引き出してリハビリをすることが大切で、今年3年目の島さんは、明るく朗らかな笑顔で次のように話します。「身体的な機能を高める中で、患者さんと目標を共有し信頼関係を築くこと。とにかく楽しいことが何よりです」

精神科神経科外来の作業療法士として、患者さんはもちろん家族との信頼関係を深めるためのコミュニケーション能力を磨くことも忘れてはなりません。その人らしい生活を送れるようになることを目指して、10人前後の小グループに専属の作業療法士が付いて、個別の支援に取り組んでいます。

そこでは相手の気持ちになって考えられる感受性が重要で、患者さんも安心できるからこそ前向きな気持ちになれます。活動の柱になっているのが様々な創作活動。手芸や陶芸から革細工等、料理、音楽活動など創意工夫を凝らした幅広いメニューを用意しています。

「たとえ簡単なものでも、作り上げることで喜びと自信を持ってもらえます。しんどいことがあるかもしれないけど、病院と家庭の中間地点で心安らぐ場所にできたらいいと思います。楽しいから行こうと思ってくれるし、続けて来てくれることでリハビリも進みます」(島さん)



医師や看護師、理学療法士等の専門職と連携をとりながら、笑顔あふれるリハビリを目指しているのです。